W-2

理論言語学を科学哲学する：生成文法、形式意味論、認知言語学の未来

山泉実・成田広樹・窪田悠介・田中太一・太田陽

構成

[1]企画者・司会者による趣旨説明　山泉実（大阪大学・言語学）　5 分

[2]研究発表　生成文法・形式意味論・認知言語学・科学哲学の立場から　各 20 分

発表 1「言語の科学的説明：その展望と課題」成田広樹（東海大学・生成文法）

言語の科学的説明は（いかにして）可能か？

発表 2「形式意味論研究における理論構築について」 窪田悠介（国立国語研究所）

形式意味論は自然科学か？

発表 3「非(自然)科学としての認知言語学」 田中太一（東京大学[院]）

認知言語学は自然科学でなければ価値を失うのか？

発表 4「容認性判断を用いた言語研究の有用性と公正性」 太田陽（中京大学[非]・科学哲学）

容認性判断後の仮説立案は HARKing*という研究不正か？*Hypothesizing After the Results are Known

[3]パネルディスカッション　登壇者相互の議論　15 分

[4]全体討論　会場からの質疑応答・総括　20 分

企画趣旨

「理論言語学にかつてほどの活気が感じられない」と喝破した講演が前回大会シンポジウムにあった。本 WS 第 2 発表者・窪田悠介による「理論言語学に未来はあるか？」である。そこでは、コネクショニズムという黒船の再来によって、古典的計算主義に基づく生成文法的アプローチの存立が危ぶまれていることが語られた。また、理論言語学に閉塞感が感じられている昨今、国内外の認知言語学会に参加したことをきっかけとして書かれた理論言語学の未来を憂う論文が SNS で話題になった。本 WS 企画者/司会・山泉実による「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」である。そこでは、言語の理論的研究を阻害する内在的・構造的な要因が多数指摘され、理論言語学を研究することの困難が語られている……。

内憂外患の理論言語学に、もはや未来はないのか？ 本ワークショップでは、危機感を共有する生成文法・形式意味論・認知言語学・科学哲学の専門家達が理論言語学を基盤から問い直す。

理論的研究とは

既存の理論を何らかの言語現象に当てはめて、分析が上手くいったことを報告する研究発表・論文が、言語学の学会で多く見られる。このような分析成功報告は、たとえ理論がどんなに専門的であっても、記述的研究であって理論的研究ではなく、理論基盤記述研究とでも呼ぶべきものであるとされた（山泉 2019）。これを含む記述的研究は、少なくとも日本においてはどの学派でも、言語学研究の圧倒的大多数を占めている（社会言語科学会設立以来の発表を調査した吉川他 2017 も参照）。記述的研究・記述文法を自称する研究はもちろん、生成文法や認知言語学といった理論言語学派や国語学もその例外ではないようである。自分の属す学派以外は違うように見えるかもしれないが、それはおそらく、他学派にも知られる大家の多くは例外的な理論家であるという事情による。つまり、理論言語学の研究とされるものは、大部分が理論を道具として用いた記述的研究であって、理論構築が主眼の研究はどの分野でもほとんど行われていないのである……。

背景：理論的言語研究を阻害する諸バイアス

理論言語学研究の大多数は理論的研究ではない、という一見逆説的な状況は、理論的言語研究を阻害する諸バイアスという観点から説明される（山泉 2019）。

- 確証バイアス　自分の信じる理論を確証する例は、反例よりも目立ち、分析成功報告につながりやすい。しかし、そのような例は、理論の確からしさを気持ちの上で高めるだけで理論的貢献はない。
- パブリケーションバイアス　分析成功報告は、理論を進展させる潜在力がないものの、応募される可能性・採択される可能性が高く、パブリッシュされやすい。一方、分析失敗報告は、正反対で、理論を進展させる潜在力があるものの、応募される可能性・採択される可能性が低い。
- 記述研究バイアス　記述研究が多数派。一般に、多数派は査読で有利。研究指導で理論研究を discourage。
- 紙幅制限バイアス　20 分や 16000 字では新理論を既存理論と比較しつつその優位性を主張できるか？
- 師弟関係バイアス　指導教員の理論を否定した新理論を博士論文に書けるか？
  一方、指導教員の理論による分析成功報告には社会的問題がない。
- その他、「理論は仮説ではなく反証される可能性も変える余地もないものだという理論観」（田中太一, p.c.）

→先人の説を否定して理論を進歩させる理論研究は人間の性向に逆らう営み。

記述、理論、哲学的基礎の関係

理論基盤記述研究を含む記述研究と理論構築研究は、対立関係にあるものではない。全ての記述は、自覚されていないとしても、何らかの理論・枠組みに基づく。

理論に基づいた記述の成果は、理論の構築・修正の種を含む。

理論の土台に、言語観、人間観、世界観、科学・学問観などの哲学的基礎がある。

本ワークショップは、根本に立ち戻って、言語理論と哲学的基礎をメタな視点から考える。

参考文献

山泉実. 2019.「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻. [https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/73698/sjlc29_044.pdf]

吉川正人・木本幸憲・岡本雅史・佐治伸郎. 2017.「報告　第 38 回研究大会ワークショップ　理論研究再考―理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか？―」『社会言語科学』19(2): 87–92. [https://doi.org/10.19024/jajls.19.2_87]

*本ワークショップは、科研費 17K17842 の助成を得て行っている研究の副産物（山泉 2019）から派生した。